



で き こ と

(社)日本図書館協会主催の「児童図書館員養成講座」が今年度も開催されました。前期は平成20年6月30日～7月5日、後期は9月29日～10月8日(10月4日を除く)の計15日間におよぶ講座です。受講の条件は、日本図書館協会個人会員であり、図書館職員として5年以上の経験を持つ者などで、事前に書類審査がおこなわれます。今回は19名が選考されました。

講座の内容詳細などは、(社)日本図書館協会のホームページ「JLA 主催行事2008年(終了分)」(<http://www.jla.or.jp/jlaevent2008.html>)で紹介されています。

(裏面にて、概要を紹介します。)

子ども図書研究室のテーマ展示

ただいま展示中です!

「一番新しいクリスマスとお正月の本」

(2007年以降に出版された本)

「子ども図書研究室講座関連資料」の本
新着図書も常時展示中です。

イベント情報

国際子ども図書館展示会

「童画の世界 絵雑誌とその画家たち」

「コドモクニ」、「子供之友」、「コドモアサヒ」などの昭和前期までの絵雑誌と、そこで活躍した竹久夢二、岡本帰一、武井武雄などの代表的な童画家たちの作品を紹介しています。

期 間:2008年9月20日(土)～2009年2月15日(日)

午前9時30分～午後5時

休館日:月曜日、国民の祝日・休日、年末年始、第3水曜日

会 場:国際子ども図書館3階 本のミュージアム

住 所:東京都台東区上野公園12-49

TEL:03-3827-2053(代表)

TEL:03-3827-2069(録音による案内)

URL: <http://www.kodomo.go.jp/>

その他:入場無料

新着資料から

知識

『語り伝える空襲 第3巻



降りそそぐ爆弾の雨』

安齋 育郎/文・監修

新日本出版社

2008年6月

第二次世界大戦での日本の被災は、東京や沖縄、広島などが有名だが、静岡や全国各地では、どのくらい被害があったのだろうか。

戦争での被災状況について、各都道府県の被害と、そのうち特に被害の大きかった戦災について記述している。第3巻は静岡県を含む東海地方を掲載。文とデータに加え被災地の写真も載せ、当時の様子が伝わってくる。また焼夷弾、艦砲射撃など関連語にもふれている。巻末には日本各地の戦争に関する資料館・博物館の情報も掲載。全5巻。【小学校高学年から】(渡辺勝)

物語

『あたらしい図鑑』



長園 安浩/著

ゴブリン書房

2008年6月

中学1年生で身長141センチの「ぼく」は、クラスの男子の中でも一番小さい。退屈な夏休み、身長191センチの老人と知り合うが、著名な詩人であるその老人からは、言葉にならない感情をスケッチブックに貼り付けてゆくことを勧められる。それは、詩人にとってはカエルの死骸や雨の跡であり、「ぼく」にとってはヒマワリのつぼみや足型であった。少年と夏と老人の死という定番の道具立てではあるが、少年が無頼の詩人に強くひきつけられていく様子が魅力的に描かれている。【中学生から】 (鈴木由)

第28回 児童図書館員養成講座 報告

講座では、前後期あわせて17の講義が行われました。そのうち後期に行われた「ストーリーテリング」と、「レファレンス」の講義の一部を紹介します。

ストーリーテリングの講義（講師：内藤直子氏 東京子ども図書館）では、事前に実習で語りたいお話を2話選び、当日はどちらでも語れるように準備しておくことと、選んだ2話を子どものためのお話会（自館でなくてもよい）で語り、そのときの様子を報告するという課題が出されました。

当日は、講師によって、受講生が語るお話が1話発表され、指定された順に発表し、数人語るごとに講評がおこなわれました。講評では、以下のようなアドバイスがありました。

- ・お話を語るときは、今見てきた面白い出来事を人に伝えたい時のように話すといい。
- ・聞き手は話の展開を知らないため、語り手は聞き手が話のイメージを描けるように、上手に間をとること。
- ・お話の最中に詰まったり、思い出せなくて言いどんでしまっても、子どもはお話が面白ければちゃんと聞いてくれる。聞き手にとって楽しい場となれば、それは失敗ではない。
- ・しっかりしたお話は、聞き手もしっかり聞くので疲れることがある。細部まで丁寧に語ると間延びしてしまうので、話はとんとんと元氣よく進めた方がよい。（例：『まめたろう』）

レファレンスの講義（講師：小山響子氏・杉山きく子氏 東京都立多摩図書館）では、事前に10題のレファレンスの課題が出され、当日は課題へのアドバイスや、参考資料の紹介などを中心に行われました。

子どものレファレンスの基本的な姿勢として、1．子どもを一人の利用者として迎える（一人

一人の子どもを大切にすること。2．気軽に聞ける雰囲気を作る（子どもが図書館の人に聞くには勇気があるため）。3．子どものレファレンスに興味を持つ（子どもはどうやって資料を探すのか？ また探せないのか？ 子どもから学ぶ）。4．一歩踏み出して対応する（おせっかいになる）。5．調べ方は1回につき1つだけ教える（子どものエネルギーを本に向ける）。6．回答は1つだけではない（相手の希望をおしはかる）。などが大切であるとのことでした。

実際のサービスにおける留意点として、1．その子なりに納得するような本を提供する。2．子どもの理解力（年齢）を考慮する。3．子どもの質問を尊重すると同時に、こだわらない。4．子どもの知りたい気持ちは対象年齢の枠を超える。5．子どもと一緒に本を読む（選書の際参考になる）。6．知りたい、調べたい気持ちを支援し、子どもの喜びや驚きに共感する。7．ふさわしい資料がない場合、次につなぎ、手ぶらでは帰さない、などが挙げられました。

どちらの講義も長年の経験を持つ講師によるもので、豊富な体験談を交えながらの内容でした。

所蔵資料から

研究書 『お話のリスト たのしいお話 1』

第3版



東京子ども図書館 / 編

東京子ども図書館

1999年7月

お話（ストーリーテリング）をする人が、お話を選ぶ時の参考になるようにと編まれたリスト。お話の簡単な内容、お話を語る際のポイント、大まかな所要時間と聞き手の対象年齢などが記載されている。巻末には出典一覧、話名索引、項目索引（お話のタイプ別、登場人物別など）がある。経験豊富な東京子ども図書館職員らの編さんによるもので、お話選びに困った際に、最も頼りになるリストである。

（安田）